

2012 年度

博士論文要旨  
(指導教授 平山正実教授)

キリスト者の死生観  
ー信仰成熟度の観点から

聖学院大学大学院  
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科  
(博士後期課程)

学籍番号 110DC005

村上純子

本研究は、キリスト教信仰を持つ人々（以下、キリスト者）の死生学研究である。キリスト教的死生学はその独自の世界観、価値観の中で、一つの研究分野として成立していると考えられ、その研究を進めることは、人はいかに生きるべきかという、人間の根本的な問いに迫る重要な課題であると考えられる。

本研究の調査目的は、キリスト者の信仰とその成熟度が、死生観にどのように影響しているのかを量的に調査することであり、この目的に基づいて3つの質問紙調査を行った。

調査Ⅰは、一般大学の学生463名（男性304名、女性159名）を調査対象として死観尺度を用いて調査を行い、宗教の有無によって、死観（死の捉え方）に差がみられるかどうかを調査した。その結果、宗教別男女別の群において、死観尺度に有意差が現れた。

概して、キリスト教群は男女ともに“浄福な来世”を信じる傾向にあった。これはキリスト教にとって、「天国」の教義が、教派や教団の違いはあっても、キリスト教としてある程度共通理解のある事柄であることを示唆していると考えられた。さらに、男性では“浄福な来世”以外の宗教間の差は見られなかったが、女性では、キリスト教群女性は比較的死を楽観的に捉える傾向にあり、仏教群女性と無宗教群女性は“浄福な来世”を信じず、死を“挫折と別離”、“苦しみと孤独”と捉えているという結果になり、宗教間の差が見られた。

希死願望に関しては、女性の方が男性よりも高い得点を示していた。しかし宗教別では、無宗教群、仏教群ではその傾向が認められたが、キリスト教群では男女間の有意差は認められなかった。つまり、単純に男性よりも女性の方に希死願望が多いのではなく、ここでも宗教による違いが現れた結果となった。

調査Ⅱでは、宗教の有無が死観のみならず、生と死の捉え方や生き方に影響を与えるものであるかを検討するために、一般大学の学生330名（男性217名、女性113名）を調査対象として、死観尺度と生き方尺度を用いて調査を行なった。その結果、男女差と共に、宗教の有無によって死観尺度、希死願望、生き方尺度に差が現れた。宗教別に見ると、それぞれの群の特徴や傾向が現れており、宗教がその人の死生観に何らかの影響を与える要因であることが示唆された。

キリスト教群は男女差が少なく、概して男女共に“浄福な来世”を信じ、死を肯定的に捉え、自分をより良くしようと努力し、自分と他者を大切にしているといえる。特に女性は、他宗教群の女性と比較した場合に、その傾向が強く現れていた。

仏教群男性は、“浄福な来世”を信じて、他のグループよりも、自分のやることに最善を

尽くし、自分の良い面を伸ばそうとし、自分と他者を大切にしているが、希死願望はやや強かった。それに対して仏教群女性は、死を苦しみや孤独と捉える傾向にあり、自分をより良くしようとする反面、過去にこだわる傾向があり、希死願望も強かった。

無宗教群男性は、比較的“浄福な来世”を信じておらず、積極的な生き方をするわけでもなく、かといって死に対して悲観的になっているわけでもなかった。無宗教群女性は、死を“苦しみと孤独”“挫折と別離”と捉える傾向にあり、希死願望も強く、他のグループと比べると、自分を良くしていこう、あるいは自分と他者を大切にしようとする部分は低く、過去にこだわる傾向が見られた。

また死観尺度と生き方尺度の相関係数からも、宗教を持つ人と持たない人の間に違いが見られた。すなわち無宗教群のみが「死を“苦しみ”や“孤独”であると感じているから来世に希望を持つ」、あるいは「来世を信じてはいるが、死は苦しくて孤独なものである」と感じていた。さらに無宗教群の中で積極的に生きようとする人ほど、「死を自分の可能性を奪う否定的なものとして捉える」、あるいは「死を否定的なものとして捉えるからこそ今を大切に生きようとする」姿勢を示す傾向にあった。また無宗教群は、死にたいと思う人ほど過去にこだわる傾向、または過去にこだわり、そこから逃れる手段として死を選びたがる傾向が認められた。このように、死の否定的な側面だけを強調して捉える、あるいは死を現実からの逃げ道として考える死生観は、心理社会的には未発達な死の捉え方であるといえよう。その点、キリスト教群と仏教群ではその傾向が見られず、本調査では、宗教がより健全に発達した死生観、すなわち「死をただ否定的に捉えるのではなく、肯定的に受け止めつつ、死があるからこそ生を大切にする」という、積極的に自分の生を全うする態度につながる死生観の形成に、何らかの役割を果たしているという結論を得た。

調査ⅠとⅡをふまえ、調査Ⅲは、キリスト者のもつ信仰が死生観にどのように影響しているのか、キリスト者の成熟度と死生観の関連性を検定、検討する目的で、日本人キリスト者およびキリスト教に親和的な人 354 名（男性 125 名、女性 229 名）を対象に行われた。調査には、先行研究で多く用いられ、比較的死生観に影響を与えると思われる内発的・外発的宗教尺度、および調査Ⅰ、Ⅱで使用した死観尺度、生き方尺度を用いた。

まず因子分析によって、各心理尺度を日本人キリスト者向けに心理尺度を構成し直し、キリスト者の死観尺度と生き方尺度の尺度構成を行った。その結果、信頼性と妥当性を得られたと仮定できた内発性・外発性宗教尺度、およびキリスト者の死観尺度、生き方尺度を用いて、キリスト者の成熟度と死生観との関連性を検証した。

本研究では、心理的側面から、成熟したキリスト者とは、「神、他者、自分に対して調和した関係を築いている者である」と考え、その尺度として、神との調和した関係の尺度を内発的・外発的宗教尺度の“内発性”、他者との調和した関係の尺度を生き方尺度の“自他共存”、自己との調和した関係の尺度を生き方尺度の“こだわりのなさ”とした。この3下位尺度の間には相関関係が確認されており、本研究において、これらをキリスト者の成熟度の尺度として利用することに、ある程度の妥当性が得ることができた。

内発性・外発性宗教尺度と死観尺度の検定結果、および生き方尺度と死観尺度の検定結果から、内発的・外発的宗教性と生き方、および死観は密接に関係していることがわかった。

すなわち、“内発性”の高い人は、神との関係を大切にし、自分と他者を大切にする生き方をしており、死を肯定的に捉えつつ、過去や失敗にとらわれずに積極的に生きる姿勢を示していた。

一方、外発的宗教性の中でも“個人的外発性”の高い人は、過去や失敗にこだわる傾向や、他者との別離や挫折など、死に対する否定的なイメージを持つ傾向にあった。これらの人々は、自分ではどうにもできないことに対処しようとして、信仰によって、あるいは死に希望を見出すことで、慰めや安心感などを得ようとするのではないかと考えられた。

外発的宗教性の中で“倫理的外発性”の高い人、すなわち宗教を倫理道徳的なツールとしている人にとっては、死は他者との別離、挫折であり、未知と終焉であるからこそ、教義的な捉え方で死を希望的に受容しようとするのではないかと推測された。これらの人々は、信仰を自らの生き方の指針、あるいは倫理的な判断の基準として捉え、それに基づいて生きようとしていると考えられた。

外発的宗教性の中でも“社会的な外発性”の高い人は、宗教や礼拝に人との出会いや関わりを求める人であり、死を“他者との別離、挫折”という側面から捉える傾向にあった。

また生き方尺度の“自己の向上”が高く、自分自身の向上を目指す人は、“内発性”と共に“倫理的外発性”も高く、死を希望的に捉えながらも、死が“終わり”であり、自己の可能性を奪うものであるという否定的な捉え方も併せ持ち、死に対して両価的な感情を持っていた。

このように内発的・外発的宗教性と死生観は関連しており、内発的宗教性の高い人は、神、自分、他者との関係を大切にし、死も生も肯定的に受け止めていたが、外発的宗教性が高い人は、過去や失敗にこだわる傾向があったり、死を否定的に捉えていたり、あるいは死に対して両価的な感情を持っていたりするなど、生と死の両方に対して肯定的で積極

的であるとはいえなかった。これらのことから、“内発性”“自他共存”“こだわりのなさ”というキリスト者の成熟度の指標が高かった人、すなわちキリスト者として成熟していると考えられる人は、より健全な死生観を持っており、「神、他者、そして自分との関係を修復し、より良い関係を築いていくという、神が本来造られた人間の姿を保ちつつ、自らに与えられているこの世での時間を意識し、死とその先にある永遠の命に向かって歩む」生き方をしているということが示唆された。

キリスト者であるということは、自らの死を受け止めて、生を十分に生きていくための「初めの一步」であるが、そこが終着点ではない。そこからさらにキリスト者としての成長を重ね、神、他者、自分との良い関係を築き、成熟していくことで、“死”をいたずらに恐れるのではなく、自らの有限性を意識した上で、与えられている“生”を生き抜くという「質の高い生き方」をすることができる。あるいは逆の言い方をすれば、自分の有限性を知り、受け入れることで、キリスト者として成熟していくことができる。神と自分と他者を大切に生きていくことが、自らの死を意識し、受け入れていくことにつながり、信仰の成熟は、より健全に発達した死生観につながっていくと考えられる。

成熟のためには年齢も大きな要素であるが、すべてではない。むしろ自分の有限性をさまざまな場面で意識することや、自分がいつ死んでもいいように心の準備を重ねていくことが重要である。そのことがキリスト者としての「質の高い生き方」につながるといえよう。そのためには、礼拝の説教（メッセージ）やキリスト者の交わりの中で、“死”や“天国”について語る場を設けたり、教会での葬儀や記念会などの機会を生かしたり、信徒の教育的プログラムの中に「自らの死の準備をする」あるいは「脳死、臓器移植、病名告知、延命措置、積極的安楽死」といった啓発的なテーマを取り入れたりすることが有効なのではないかと思われる。

本研究の意義は、①I/E-R scales（内発的宗教性・外発的宗教性の心理尺度）を邦訳、尺度構成し、日本人キリスト者対象の内発的・外発的宗教尺度を作成したこと、②死観尺度、および生き方尺度に因子分析をかけて、キリスト者対象に尺度構成しなおしたこと、③キリスト者の成熟度という観点から死生観を捉えたこと、にあると考える。

日本人キリスト者の心理学的研究は数が少なく、これから発展が望まれる分野である。日本においてもキリスト教の心理学的研究が今後さらに発展することを期待する。

聖学院大学大学院  
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科  
(博士後期課程)

学籍番号 110DC005

村上純子